
逃走中 ルイン・エスケープ

黒夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃走中 ルイン・エスケープ

【NZコード】

N5823X

【作者名】

黒夜風

【あらすじ】

狂気は人の本性を暴く。人は悪。本性は漆黒の悪。殺し合ひ姿こそ真の姿なのだ。狂乱の果ての破滅。悪は最高の娯楽であるゲームで乱れ、散れ！「ミッション5* ブルボン 誰かと性行為を行え」

ルール

【ルール】

- 1、ハンターに捕まつたり、自分が死亡したらゲームオーバーです。
- 2、与えられたミッションは必ず1時間以内に実行して下さい（一部除く）
- 3、最後まで残れたら賞品を獲得できます。
- 4、途中棄権（自首）はできません。
- 5、1つのステージでのゲーム時間は24時間です。
- 6、ゲームオーバーしたら復活できません。チャンスは1回だけです。
- 7、自分のケータイは必ず所持して下さい。ミッションもそのケータイに送られてきます。

プロローグ

死にたくない。

まだ生きたい。

生への執着と死への恐怖が逃走者を狂わせてゆく。

ミッション失敗は脱落。脱落は死。

強制参加の闇のゲームが人の本性を暴き晒す。

狂った歯車。

それが更なる狂音を立てて動き始めた . . .

【体育館／トワイライト 確認】

……ここは体育館だろうか？ 集められた人々。子供もいれば大人もいる。男性もいれば女性もいた。

「さて、ゲームを始めましょうか」

……！？ いきなりどこからか声が聞こえてきた。声色からして男性だろうか？ それにしてもゲームって一体何なんだ？

「ミッション失敗は脱落。脱落は死。それだけを覚えていればこのゲームで困る事はありません。それではさっそくゲームスタート!」

体育館に響く男の声。その声が聞こえたかと思うと俺の意識は途絶えた。ミッション? 失敗は脱落? 脱落は死、だと!?. どうなってんだ.....?

プロローグ（後書き）

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

//ミショソノ1・2* 酒だあ！ b yストイバー

【A棟3F 2 - 7教室／トワライラル 確認】

俺が意識を取り戻した所は薄暗い教室だつた。窓から見える風景は黒一色。どうなつているんだ？ 俺立ち上つて窓を開けようとしたがビクともしない。鍵がかかっているワケじゃないのに。教室内には30組ほどの椅子と机。全て小学生用ではなくどれも大人が使えそうなほどの大きさがある。高校生用か？ という事はここは高校なのか？

「あ、あの、君もゲームの参加者？」
「うわアツ！」

突然、後ろから声をかけられた俺は恥ずかしくも大声を上げてしまう。俺は素早く後ろを向く。薄暗くて見にくかつたが短い髪をした女の子が立つていた。俺と同じくらいだろうか？ だとすれば16歳ぐらいか？

「私はミコート。宜しくね」
「お、俺はトワイラルだ。宜しくなミコート」

ミコート、か。暗闇に慣れてきたのか彼女の顔もだんだん分かるよくなつてきた。彼女、なかなか可愛い顔しているな。

俺がそんな事を思つていると、2人のケータイが一斉に鳴り響いた。2人一緒つて珍しいな。そう思いながらケータイを開ける。

『主催者…ミショソノ1・2* ストイバー 酔っぱらいのマネをする』

主催者？ 誰だソイツ？ それにストイバーって誰だ？ 酔っぱらいのマネをする？ どういう事だ？

俺の頭に「？」も文字が大量生産される。分からぬ事ばかりだ。俺は彼女の方を見る。彼女も首を捻る。恐らく彼女の頭にも「？」の文字が量産されているのかも。量産型？マークだな。……うん、面白い事言つた。我ながら。

「ねえ、どうするの？」

「ん~、まあ俺らには関係ないだろ。ほっとけ。どうせせりへてもやんなくとも変んねえ」

「そ、そうだね。どうせ何も起こらなによね」

そんな事を言いながら俺とヨコーはその教室を出た。その後は雑談に雑談。不安をかき消すようにしゃべり続けた。この時、既に頭からミッション1の事は消えていた。

【A棟4F 1 - 3教室／ストイバー 確認】

ミッション1は私に下された。内容は“酔っぱらこのマネをしろ”。……内容はどうつてことないが、“ミッション1”という事は2や3があるのか？

暗い教室。私はイスに座つて考える。……つと、考える前に一応、遂行しどくか。ミッション失敗でメンダーな事になるのはヤメンだし。

「酒だあ！ 酒を持つてこいッ！」

そう言いながら私は近くのイスを蹴つ飛ばす。イスは机に当たり、音を立ててその場に倒れる。うわ、酒乱だな。酒に酔つて暴れる人

だな。

その瞬間、この教室の静寂が破られ、私のケータイの着信音が鳴り響く。誰だろな？ こんな時にメールしてくるのは。出会い系サイトの勧誘メールじゃないといいけど。私は中年デブやヤリチンに体を提供する気はないんで……

『主催者…ミッショーン1 成功』

マジか。アレで成功なのかい。……って言つたか主催者は見てたのかよ！ うわー、恥ずかしいな。私のイメージ崩れそうだ。ま、別にいいケドな。

その瞬間、教室の扉が開かれる。私は驚いてそつちに目をやる。……暗くて見にくいけど、入ってきたのは女の子だった。

「だ、誰だ？ お前は？」
「……私は、私はレストル」

レストルと名乗る女の子はゆっくりと私に近づいてくる。な、何？ 何の用だ？ メアド交換しましょう、なんて言われてもしないぞ？ ……ていう雰囲気でもないか。

「ねえ、その、早く楽になつた方がいいよ」「は？」

「今は簡単なミッショーンだけど……いずれ、手に負えないミッショーンがやって来る。実行すら難しいミッショーンがやってくるの」

実行すら難しいミッショーン？ 難易度ヒヨつてヤツか。手に負えないってのが気になるな。その時、私のケータイと彼女のケータイがなる。同時か。偶然つてヤツだな。その瞬間、彼女はとんでもない言葉を発した！

「死んだ方がいい」

「は？ はあ！？」

「来るの！ 主催者が送つて来るの！ 絶対に、絶対に今死んだ方がいい！ まだ楽な内に！」

ちょ、何言つて……！

「一度“参加者”になつたらもつ誰も逃げられない！ “みんな、死んだ”」

みんな、死んだ……？ な、に？ どういつ事？

私の心臓が今までにはほどバクバクする。もし、危険察知センターがあつたらきっと激しく反応しているだろう。コイツ、頭がヤバい。何を言つているんだ、コイツは！

「ミッション成功はその場しのぎでしかないの……」

「あ、あの、どうでもいいケド、わざと届いたメールを確認させてくれないかな？」

私は別にメールを見たかつたワケじゃない。本当はこの子とこれ以上、話したくなかっただけだった。このヤバい事を言いまくつてる子と。

『主催者・ミッション2* テレジア 誰かに「大好きです」と言つ』

愛の告白をしろつてヤツか。ミッション1より少し難易度が上がつたか？ いや、そんなに変わりはないかもしないケド。

その時、私の近くですり泣き始めた。言つまでもなくレストル、が。どうした？ 私が泣かせたのか？ いや、んなハズないか。

「……このミッションで私は彼と出会い、仲間になった。でもそのせいで彼は死んだ。私の為に彼は、彼は……！」

そう言つと彼女はケータイを握りしめてその場に座り込む。

いや、待て。待て待てマテマテ。おかしいでしょ。「このミッションで「ってこのミッションは今来たばっかじやん。」彼と出会いって私は女だし、死んでもないぞ。勝手に殺すなよ。私は後80年は生きるぞ。

その時、教室の扉が開かれ、別の女性が入ってきた。ピンクの髪に短い髪の毛。年齢は10代後半、か？

「あ、どーも」

「お、おお、何だ、お前は？」

私がそう言つた途端、彼女は叫んだ。

「“大好きです”！」

「……ん？　ん？」

やべえな。なんだ、コイツは。頭のヤバい子の次はレズな女の子か。

……私の前に レズが 現れた

//ミッション1・2* 酒だあ！ b yストイバー（後書き）

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

//芝シヨン3・4* 女の子の胸を揉め

【A棟3F 廊下／トワイラル 確認】

『主催者…//芝シヨン2 成功』

俺はケータイを開じる。2・7教室で出会ったミコートはスマートフォンをしまう。いいなあ、俺もスマートフォンにしようかな。
最近、色持つてる人、増えてきたしな。

……それよりもこのゲームつていつ終わるんだろう？なんか、面白くねえな。酔っぱらいのマネさせたり「大好きです」って言わせたり、何がしたいんだ？ 主催者は。

「ねえ、パチンコの玉つてあるじゃん。アレってさ“鉄”で出来て
いるんだよ」
「あー、そういうの？」

お前はパチンコ行つたのか？ つか、何歳だ、お前は。

「ホラ、“金を失う”と書いて鉄。パチンコの玉も鉄。つまり、パチ
ンコするお金失うつて事なんだよ」

//コートが一回一回しながら言う。なかなか上手い事言つた。コ
イツは。俺がそう思つてると再びケータイが鳴る。俺のと彼女の
が。クソ、また主催者からのメールか。

『主催者…//芝シヨン3*ビザンツ A棟からB棟へ移動しろ。2
Fに渡り廊下がある。そこからB棟に向かうといいだろ。ちなみに
普通の教室があるのはA棟である』

はあ…… もう、ワケ分かんねえな。今度は移動しろ、かよ。しかもアドバイスつきとはな。……ん？ B棟に移動しろ？ という事はA棟とB棟があるのか？

「B棟があるなんて知らなかつたね。普通の教室があるのはA棟つて事は今、私たちがいるのはA棟なんだね」
「あ、ああ、そういう事になるな。B棟には調理室とか美術室とかがあるんだろうな」

俺がそう言つていると前方から誰かが走つて來た。ネクタイを締め、きつちりとした服装。サラリーマン風の若い男だった。もしかして、ミッションのビザンツか？

「あ、すいません」「ん、どうしました？」

近くで顔を見て分かつたが彼は少し長い髪にメガネをかけていた。遠くからだと細かい所まで見えないもんだな。

「もしかして、アナタがビザンツさんですか？」
「ええ、そうですよ。ミッションを受けちゃつたのでね、これからB棟に行つてくるよ。じゃ、またどこかでね」

それだけ言つと彼は再び走り出し、近くの階段を降りて行つた。ミッション遂行は一時間以内だからそんなに急ぐ必要もないだろうに。まあ、早く終わらせた方がいいケド。

「あのビザンツって人、少しカッコいいね」「え？ そう？ 普通つて感じだけどな」

「それよりもこのミッションのおかげでA棟とB棟があつて渡り廊下は2階にあるって事が分かったね」

確かにそうだな。俺も今までA、Bの二つの棟があるなんて知らなかつた。もちろん、渡り廊下がある事も。それが2階にある事も。……もしかしてこのミッション3の狙いは俺たち全員にこの事を分からせる為のミッションだったのか？ 主催者の狙いはこれなのだろうか？

俺が色々、考えているとケータイが鳴つた。

『主催者・ミッション3 成功』

……という事はビザンツさんがB棟に到着したという事か。結構走るの早いんだな。元々は陸上部かサッカー部かに所属していたのか？ まあ、俺にとってはどうでもいい事だけだ。

【B棟2F 廊下・ビザンツ 確認】

ミッション成功、か。でも不思議だな。何で僕がB棟に来た事が分かつたんだろう？ 主催者はどうやって僕の位置を知ったんだ？ もしかしてGPSかな？

まあ、それよりももっと不思議なのは“なんで僕ら全員のメールアドレスを知っている”んだろうね？ いつの間に主催者は僕らのメールアドレスを知つたんだろう？

そう思つていると真っ暗で静かで物音が全くしなかつた空間の静寂が破られた。僕のスマートフォンの音によつて。

『主催者・ミッション4* ハプスブルク 女の子の胸を揉む』

【A棟3F 廊下／トワイナル 確認】

お、女の子の胸を揉む！？ どんなミッショングなんだ！ ちゅう
とふだけ過ぎていなか？ ……も、揉んではみたいけど。

「揉まれる子、可哀想だよ。変なミッショングだね」

「うん、全くだな。ハプスブルクってヤツは男なのか？ それとも
女か？ 年齢は？」

「うーん、あの体育館で見た感じ、男女比は同じくらいだったけど、
若い人が多かつたかな？」

あの状況でよくそこまで見ていたな。俺は半分混乱していたよ。
その冷静な頭も欲しいわ。

「ねえ、どうでもいいけど、私、喉乾いた」

「いや、どうでもよすぎるんだろ。それより、今はミッショング4だ」

「えー、関係ないって私たちには」

そう言つといコートは先に歩き出す。お前も一応、“女の子”な
んだけどな。やつ心の中では咳ながら俺は彼女の後に続いた。

【A棟2F 進路指導室／トワイナル 確認】

A棟2階の渡り廊下のすぐ近くにあった進路指導室という部屋。
俺とミコートはここに来た。彼女が「ここならあいつら…」って言
つたからだ。

「はい、トワイナルの分！」

そう言つてミコートはカップにお茶を注ぎ、俺に渡して来る。まさか、本当にお茶があるなんて……

俺は近くのイスに座り、お茶を飲む。少し濃い緑茶か？まあ、別に飲めない事はないんだが。

「あ～、おいしいね」

「そうか？俺はコーラとかサイダーの方がよかつたけどな」

「えー？炭酸つておいしい？私、炭酸系のジュースつて苦手なんだよね」

炭酸苦手つてマジかよ。俺は炭酸大好きだけどな。

俺が残りのお茶を飲もうとした時、ケータイが鳴った。2人のケータイが。これはメールの着信音だ。2人同時に。という事は主催者からの……メール！？ミッショング？いや、違う。だとしたら……ミッショングの成功、メール！？

そんな！ハプスブルクはミッショングを、女の子の胸を揉むといつミッショングを！成功、させた……！？

『主催者ミッショング成功』

そんなバカな！なんでこんなクソミッショングを実行したんだ！？どうやって！？近くの子を襲つたのか！？無理やり、実行したのか！？

俺のケータイを持つ手は微妙に震えていた。なんで、実行したんだ……！

そして、ケータイがメール着信を知らせる音と共に激しく振動した！主催者からのメールだ！！

//シラソン3・4*女の下の胸を揉め(後書き)

【現在情報】

逃走者：50名

脱落者：0名

//ミッション5・6* 誰かと性行為をして

【A棟2F 進路指導室／トワイラル 確認】

『主催者…//ミッション5* ブルボン 誰かと性行為を行え』

「クソッ！ ふざけんな！ こんなミッション、するワケねえだろ
おが…！」

俺はケータイを握りしめる手に思わず力が入る。その掌には汗が
滲んでいた。

「酷い！ //ミッション4、5つでイタズラが過ぎてるよ…」

「全くだ！ 主催者の野郎、ふざけやがって。いい加減、ムカつい
てきたぞ！」

その時、2人のケータイが鳴り響いた。誰だ！ こんな時にメー
ルしてきやがった……いや、2人同時？ という事はまさか、主催
者からの、メール？ あ、ありえねえだろ。あのミッション5が実
行されたのか？ そんな事、絶対にない、だろ……？

俺はガクガクする腕と手でケータイを操作し、メールを開いた。

『主催者…//ミッション5 成功』

「ああああ…！ もうワケ分かんねえ！ マジどうなつてんだ！
ぜつてえおかしいだろ！ 主催者の野郎、ウソメール送つてんじ
やねえのか…！」

「ねえ、私に、こんなメール、来たらどうすみや…？
「そんなミッション無視つてやれ…」

俺はそれだけ言い放つと机を思いつきり叩く。マジで意味わからねえ。この大会だかゲームだか知らねえもの、いつの間に俺は参加になつたんだ！ いつになつたら終わるんだ！

その時、再びケータイが振動し、鳴った。俺のと、ミコートのが。また主催者からの……もう、イヤだ！

『主催者：ミッショーン6* ロマノフ 誰かにミッションを下せ。内容はなんでもよい』

今度は、普通のミッションか。クツ、ロマノフってヤツが変な事、考えないといいけどな。……ん？ 待てよ。「誰かにミッションを下せ。内容はなんでもよい」？

そうだ、そうだ！ やつた、やつたぞ！ このミッションを使えばこの意味不明な大会を終わさせるじゃないか！

「ど、どうしたの？」

「いい事を思いついたんだ！」

「いい事？ なに？」

「主催者にミッションを下すんだよ！ 今すぐ、この大会をやめろつてな！」

「あ、そうだ！ それだよ！ それいいね！」

これでこのワケ分かんない大会を終わらせる。この大会をぶつ潰し、主催者を殴り倒してやる。

今まで暗く、沈んでいたミコートの表情がぱッと明るくなる。彼女の顔に笑顔が戻ってきた。俺の心にも光が戻ってきた感じがした。

私は色々と迷っていた。

「で、出来るワケ、ないじゃん……」

私の弟がそう言いながらガクガクと震える。私はミッショングのハプスブルクはさておき、ミッショング⁵のブルボンに“罰”を下されるつもりだった。

ブルボンの受けたミッショングは「誰かと性行為をする」だった。私はブルボンが誰かを犯したと思っていた。ワケの分からなミッショングを自分が大切が故に実行した。他人を犠牲にしてまで。

でも、弟は言つた。ブルボンが女性だったら？　なるほど、そういう考え方もあるか。女性が男性を犯した。そういう考えは私にはなかつた。

「ブルボンが例え、男性だとしても“死ね”つていうミッショングを与えるなんて……」

「じゃあ、どうする？　“ロマノフ”」

「ミッショング^{6*}誰かにミッショングを下せ。内容は何でもよい」。今までのミッショングの中で一番簡単のような氣もあるこのミッショング。誰かに簡単なミッショングを与えるだけでもいいし、ミッショングに便乗して誰かを殺す事も可能だ。

「あ、アレ？　姉さん、あっちから誰か来るよ？」

「え？」

私はロマノフが指差す方向を見る。2人の男女が走つて来る。どちらも若い人だ。もしかして、私と同じ10代の学生だろ？

「あ、ちょっとといいですか？」

「え？ 何？ アナタ達は？」

「俺はトワイラルっていうヤツだ。今、ロマノフってヤツを探しているんだけど……」

ロマノフを探している？ つまり、私の弟を探している？ ビックリだ？

「な、なんで探している？」

「私たちはそのロマノフっていう人にミッションを下して貰いたいの。主催者に向けて「今すぐこの大会を終わらせろ」ってね

なるほどー。このミッションを利用してこの大会（？）を終わらせるのか！ それはいい考えだ。

私は弟の方を見ると無言で、少し微笑んで頷く。

「分かったよ。姉さん」

「え？ お前がロマノフなのか？」

「……うん。そうだよ、僕がロマノフだよ」

「そうだったのか。じゃ、頼むよー！」

「任せて！ 主催者、この大会を終わらせろオー！」

弟は大きな声で暗い廊下に向かって叫んだ。その声は暗闇へと消えていった。……これでいいのか？ いや、いいんだよな。一応、ミッションは下したんだし。

「ありがとな、ロマノフ！ これでこの大会はおしまいだ

「え、あ、うん、そうだね」

「これで主催者も終わらせざる得ないよ。だって“ミッション失敗は脱落”だからね」

私はあの体育館で少しパニックに陥っていた。だからあの時、主催者の言つた言葉はこの程度しか覚えていない。ミッション失敗は脱落。脱落は……この先は忘れた。

主催者がミッションに従つても失敗してもこの大会は終わりだ。主催者が脱落していなくなつたらきっと大会そのものが成り立たないからな。

私はもう一度、廊下の先を見る。真つ暗な闇。それだけがそこにあつた。……なぜか分からないけど、なんか不安になる。何か忘れているような気がするのは私だけ……？

//芝シヨン5・6* 誰かと往行為をしる（後輩や）

【現在情報】

逃走者…50名

脱落者…0名

//ミシショーン6* //ミシショーン失敗は脱落。脱落は死

【A棟1F 廊下／トワイラル 確認】

ロマノフが主催者に//ミシショーンを下してからそろそろ一時間だ。
俺の記憶が正しければ確か//ミシショーンは一時間以内に実行しなければならない。

主催者はこの//ミシショーンにどう立ち向かうのか。実行すれば大会は終わり。脱落しても主催者不在で大会は終わり。どうなるとも大会は終わりだ。

「ねえ、さつき電話してきた“レストル”って友達？」

「いや、俺は知らねえけどな。ミュート、お前は？」

「私も知らないよ。レストルなんて子」

つい10分ほど前、レストルと名乗る女性がロマノフのケータイに電話をしてきた。内容は//ミシショーンはどうだったのか？ という内容だった。

ロマノフは「主催者に大会を終わらせろって//ミシショーンにした」と答えた。しばらくそのレストルってヤツは黙っていたが、「大会が終わるって信じてる」とだけ言つて電話を切つた。

「アイツ、何で電話してきたんだ？ 何があるのか？ 俺には予測がつかない。一体、なんで電話してきたんだ……？」

その時、俺のケータイ、いや、全員のケータイが鳴つた。という事は主催者からのメールだ！

「いいか？ 見るぞ？」

ロマノフ、プロイセン、ミコートの顔を見ながら俺は言った。こ

のメールに大会の運命が書かれているハズだ。続くのか、終わるのか。いや、どうやっても終わる。

主催者が実行しようが、失敗しようが絶対に終わるハズだ。俺はそう思いながらケータイを開け、メールを確認した。

『主催者・ミッション6 失敗』

は？ なんで、だ？ ミッション6失敗って……？

『ロマノフはミッション失敗により脱落とする』

俺の頭の思考が停止した。意味が分からなかつた。どうなつているのか全然理解できなかつた。なんでロマノフがミッション失敗なんだ？

俺はロマノフを見る。彼はケータイを持ったまま、まばたきもせずに口を僅かに開け、画面を見つめていた。

彼は確かに「主催者」に「大会をやめる」とこいつミッションを下したハズだった。

「な、なんで！？ なんで！？ 僕はミッション6をやつたよ！…？」

その時、俺の頭にとある文字が浮かび上がつた。「ミッション成功」

ミッション1から5まで全て主催者から「ミッション成功メール」が届いていた。では今回は？ 今回のミッション6では届いたか？

否。『ミッション6 成功』なんてメールは見ていない。

クツ！ なんで気がつかなかつた！ ロマノフが叫んだ後、ミッションを実行した後、「ミッション成功メール」が届かなかつたのになぜ気がつかなかつた！？

「うわ、わあ！ 僕はどうなつ……」

ロマノフが何かを言いかけた瞬間だった。空気を裂くような轟音と共に彼の上半身が爆発したのは……！

熱風が俺達の体に強く当たり、その衝撃でその場に倒れる。彼の周囲には熱された血と肉片が飛び散り、背筋が凍りつくような光景を作り出す。 血と肉片で水玉模様が辺り一帯に描かれた。

「う、うわあ！」

「イヤあッ！」

悲鳴を上げるミユートヒロイセン。彼女達は服にへばりついた血と肉片を手で慌てて払いのける。

一方、上半身の消えたロマノフはその場で、崩れるように倒れ、辺りに血をまき散らす。その体からは僅かに白い煙が上がり、辺りに強烈な異臭を放つ。

爆死。それがミッシュョン失敗者の末路……！ ミッシュョン失敗は脱落。脱落は……死！？

ふと、俺の脳裏にあの体育館での放送が蘇る。「ミッシュョン失敗は脱落。脱落は死。それだけを覚えていればこのゲームで困る事はありません。それではさっそくゲームスタート！」

「脱落は、死だつた……」

俺の口からポロリと出たその言葉。ミユートヒロイセンは座つたまま、ガクガクと震えながらロマノフを死体を眺めていた。しばらくその場から動けず、ぼう然としていると3人のケータイが鳴り響いた。誰も確認しようとしてない。俺だけが震える手でケータイを開け、メールを確認した。主催者からだつた。

『主催者・私は「主催者」という名前ではない。私にミッションを下したければ私の本名を知れ』

そして、もう一件のメール……

『主催者・破滅へのカウントダウンはもう始まっている。お前達は私の駒でしかない。少しでも長く生きたければ本性を晒せ。理性を捨てろ。他人を犠牲にし、自分だけが生き残る事だけを考えよ。一部の者達は分かつてないようだが、最初にも言った通り、ミッション失敗は脱落。脱落は死、である。ミッション6失敗者のロマノフには爆死してもらつた』

ロマノフの爆死…… やっぱ主催者の仕業かッ！ クソ！ なんてヤツだ！ 「ロマノフには爆死してもらつた」その文章の下にはミッション7が記載されていた！ ……これは絶対に死者が出る最低なミッションだった……！

破滅へのカウントダウン…… 僕達は他人を犠牲にしないと死ぬのか？ もし、主催者が他人を殺せ、というミッションを下したら僕達は殺し合いをしなけりやいけないのか……？

〃シショソ6* 〃シショソ失敗は脱落。脱落は死（後書き）

【現在情報】

逃走者：49名

脱落者：1名

ミッショング * 2人で一つの物を奪い合え……？

【B棟4F 廊下／サトラップ 確認】

次は俺か！ だりイけどミッションやんねーと爆死なんだろ！？
だったらやるしかなねーな！ 絶対に俺はミッションを成功して
やる！ こんなんで死んでたまるかよ！！

『ミッショング * バビロン サトラップ 「目」を手に入れる。た
だし、「田の模型」はこの建物には1個しかない。今から1時間後
に「田」を持っていなかつた方には死を与える。なお、1時間後に
どちらも「目」を持っていなかつた場合、両方に死を与える』

【A棟3F 2-1教室／バビロン 確認】

私とサトラップの戦い…… 目の模型が1個しかないのなら当然、
取り合いになる。殺し合い、なんだな。破滅へのカウントダウンな
んだ。……私は死れない。絶対に目を手に入れろ！ 例え、相手を
殺しても！！

「ふ、ふふ、ははは！ 目の模型…… それが私の命の鍵だッ！」

私は扉を勢いよく開ける。開けた先の廊下には1人の男性が立つ
ていた。彼は私を見るとぎょっとしたような表情を浮かべる。すま
んな。ビビりせて。でも私には時間がない。早く、早く、サトラッ
プよりも「田の模型」を手に入れなければ！ 私は絶対に生き残る
！！

【A棟1F 廊下／】

『ロマノフ 確認

ミッショングループ失敗：死亡

変異開始 ハンター起動中 残り4分12秒

木端微塵になつたロマノフの上半身。辺り一帯に飛び散つた肉片とおびただしい血。彼はミッション6に失敗し、脱落した。爆死という形で。

だが、彼は“再び動き出す”。飛び散つた肉片や腕などが動き出し、それらは集まる。残つた彼の下半身に集まつてくる。集まつた肉体は細胞分裂を急速に繰り返し、次第に元の形に戻つていく。再び人型に戻つていく。

『ハンター起動中 残り2分17秒』

だが、新たに再生した部位は真つ赤な、まるで皮膚を剥いだような感じであった。それに所々がゴツゴツし、元のロマノフとは異なつた状態だった。

人型に戻つたそれは立ち上がり、動き始める。全ての逃走者に課せられる新たな試練の誕生であった。

『“ハンター 起動”』

【B棟1F 美術室／トワライラル 確認】

ロマノフは死んだ。誰かにミッションを下せ。彼はその簡単なミッションで死んでしまった。俺の提案を受け入れ、実行して死んで

しまった。俺が殺したのか？ 間接的に、だが。

彼の姉、プロイセンは今、俺の横の椅子に座っている。その顔に生氣はない。弟を失った悲しみ。大切な家族を失った悲しみ。さつきまで一緒にいた大切な人を失った悲しみ。それがひしひしと伝わってくる。

「ねえ…… 私もいつか、死んじゃうのかなあ？」

「わかんねえよ。でもミッションに失敗したら……」

ミッション失敗は脱落。脱落は死。爆死という形で死を迎える。強制的に、本人がどれだけ嫌がつても、どれだけ生きたがつても死ななければならない。

俺は初めて人の死を見た。死がやつてきた時、その人の人生は終わる。これまで頑張つて生きてきたもの全てが消えてしまう。

このゲームはいつまで続くんだ？ もしかして、全員が死ぬまで続くのか？ そして、今回のミッションでも誰かが死ぬのか……？

【B棟3F 生物室／サトラップ 確認】

俺は目の模型を確かに握る。丸い球体を確かに握った。これで俺はミッション完了だ。死は免れたようだな。厳密には“まだ”なんだけどな。後、ミッション時間は10分程度。残り10分、これを守り抜けば俺は死ななくて済む。

俺が生物室の出入り口に行こうとした時、その扉が勢いよく開かれた。勢いよく扉を開け、入ってきたのは1人の女性だった。

「…………！ お前、それは！」

入ってきた女は悔しそうな目を俺に向ける。ああ、そうか。この

女がバビロンか。つまり、俺と同じ「ショノフ」を下された人間。

「わ、私は、死ない！　こんな所で意味もなく、意味もなく、殺されるかッ！」

そういうとバビロンは近くの椅子の脚を掴み、持ち上げる。俺から奪う気か。そうはさせねえよ！　俺も命かかってんだよ！

俺は持っていたバットを持ち、女がイスを投げる前にバットを投げてやった。グルグルと素早く回転しながらそれは女の顔に直撃する。

「ひ、あッ……！」

バビロンはその場に倒れる。椅子が激しい音を立てて落ちる。バットはその女のすぐ近くに金属音を立てて落ちる。

俺は素早く女の近くに落ちたバットを拾い上がる。バットの冷たく、硬い感触が俺の肌に伝わる。……殺せ。殺せ！　生かしておくれのは俺が危険だ！　殺せえッ！！

空気を裂き、一気に振り下ろす。硬いモノに向かつて俺は手に持つバットを振り下ろす。硬いモノにバットが当たると同時に悲鳴が上がる。

「や、めえ！　が、はッ！　も、もう、止め、て！　いた、いッ！」

構うな！　始末しろ！　俺の命を脅かす存在だ！　緊急事態だ！
殺してしまえ！　徹底的に、徹底的に！

「や、め……！　許し……！」

もっと、もっと強く、何度も叩け！　もっと、何度も！　殺れ！

*

俺は息を荒げ、近くにあつた椅子に座る。生物室には鉄の二オイ
が充満していた。俺の服は大量の返り血で埋まっていた。

俺のケータイとバビロンのケータイが鳴る。俺の成功メール……
だな。

『主催者：ミッショング バビロン サトラップ 成功』

成功……？ 俺とバビロンが成功？ 何でだ？ 「目の模型」を
手に入れたのは俺で確か、「目の模型」は1個しかないんじゃない
のか……？

俺がそう思つていると、俺のまるで疑問に応えるようにメールが
送られてきた。

『主催者：「目の模型」は確かに1個しかない。ただ、私は「目の
模型」を手に入れろとは言つてない。「目」を持つていなかつた方
に死を与えるとは言つたが。「目」は既に全ての逃走者が持つてい
るハズだ』

『主催者：バビロン 死亡』

俺は何となくメールの内容を理解したような気がした。何もしな
ければ、誰も死ななくて済んだのか……

真っ暗な生物室には俺と死んだバビロンだけがいた。

ミッション7* 2人で一つの物を奪い合え……？（後書き）

【現在情報】

逃走者：48名

脱落者：2名

ミッショングループ200枚目の死

【A棟4F 1-7教室/トワイラル 確認】

最低だ……ミッショングループは人の恐怖を利用した最低なミッショングループだつた。あのミッショングループのせいでもう人が死んだ。そして、ミッショングループはまだ続く……

『主催者・ミッショングループ逃走者全員 職員室に200枚の紙を置いていた。全員、1~5枚まで紙を取り、ただし、200枚目の紙を引いた逃走者には死を引く。尚、200枚目を誰も引かなかつた場合、全員に死を与える。一度引き終わつたら再度引くことは不可能。よく考えて引くんだな』

【A棟2F 職員室/レパート 確認】

今度は間違いない誰かが死ぬんだね。アタシはまだ死にたくないやりたい事まだいっぱいあるしね。だから、アタシは真っ先にこの職員室に乗り込んだ。幸い、アタシが一番だつた。だからここで引けば絶対死ぬ事はない。

さて、何枚引こうかな……？ 一度、引けば再度引く事は不可能。つまり、48人目になつた時に残り195枚以上にしておかないと全員が死ぬ事になる。

「……よ、よし…」

1、2、3、4、5！ アタシは机の上にポツンと置かれていた紙の束から一気に5枚引く。これで残り195枚になつた。アタシ

が5枚引いてから少しの間を置いて、メールが来た。

『主催者：レパント 終了／残り195枚／残り47名』

「へへっ！ ジャ、次はオラッチの番だな！」

アタシを押しのけ、赤髪の男の子が紙の束に手をかける。そこでアタシは気づいた。この職員室に、多くの人が集まっているのを。

「6、7、8、9、10つと…」

『主催者：カール 終了／残り190枚／残り46名』

*

【A棟2F 職員室／トワライラル 確認】

『主催者：ミユート 終了／残り16枚／残り6名』

ミユートが引き終え、残りは14枚と6名。引いてない人に俺も入っていた。

「お、俺はぜつてえ死なねえよ！ こんな紙切れで死が決まつてたまるか！」

男が紙を引いていく。引いた数は……5枚。

『主催者：サトラップ 終了／残り9枚／5名』

順番は、男性 女性 少年 男性 倣。下手すれば俺が死ぬかも知れない。ミユートが不安そうな顔で俺を見る。こんなゲームで殺

されてたまるかよ！

『主催者・ルター 終了／残り6枚／4名』

残り、6枚と4名か……

「さて、次は私の番か」

女性が紙を引く。2枚だけ。もつと引けよ！

メールが届いたがそんな事を気にせず、少なくなつた紙の束を見続ける。額に汗が滲む。心臓がバクバクと激しく動く。

「つ、次は僕、か……どうじょひ……」

氣弱そうな少年が泣きそうな顔で紙の束の前に立つ。5枚引けよ！ 頼むから！

俺がそう思つていてるとさつき、紙を引いた女性が俺に近づいてきて言つた。それも耳元で、誰にも聞こえないよつこ。

「助けて……やろつか？」

「え？」

「あの少年が5枚引けば残り199枚。つまり、200枚目を引くのはお前の前の男になる。でも5枚以下なら男は一枚だけ引いてお前が死ぬ」

そんな事は分かつている！

「私に従つなら助けてやつても、いいぞ……？」

「クツ、命にはかえられない。俺は無言で頷いた。この時、俺

はほとんど何も考えずに首を縦に振っていた。……って、どうやって俺を助けてくれるんだ？ 再度引く事は不可能じゃないのか？

「“ハプスブルク”、5枚引け」

女性が少年に向かつてそう言った。……ハプスブルク？ 俺の中で数時間前の記憶が蘇る。『主催者…ミッション4*ハプスブルク女の子の胸を揉む』

そのミッションは成功した。という事はハプスブルクは生きている。……そのハプスブルクはあの少年！？

「…………！ え、で、でも」

「やれ！ 早く引け！」

ビクリと体を震わせ、ハプスブルクは慌てて紙を引く。それを見ていた男が慌てて止めに入る。彼の次に紙を引く男が。

「お、オイ！ テメエ、何をしやが……ッ！」

鈍い音と共に男が倒れる。ハプスブルクに命令した女性の手には椅子。その脚で彼の頭を思いつきり、殴りつけたのだ。

「つてえな！ ふざけんなよ！ このクソ女が……！」

男が女性に飛びかかる。彼女を押し倒し、長い金色の髪の毛を摑む。そして、拳を振り上げ、彼女の顔面を殴りつけようとした。その瞬間だった。全員の一斉にケータイが鳴ったのは。まさか……！

「なッ！？ ハプスブルク！？ テメエエ……！」

鬼のような形相で199枚目の紙を握っているハプスブルクを睨みつける。彼は怯えたような表情で後ずさる。男が女性から手を離し、立ち上る。その瞬間、ハプスブルクは逃げ出した。その後を追う男。再びケータイが鳴った。

「うわああ！」

「待て、このクソガキがアツ！－」

男はすぐにハプスブルクに追いつく。彼の頭を掴み、床に押し倒し、その首を絞める。アイツ、ハプスブルクを殺す氣だ！

目をカッと見開き、首を絞める男。その表情には恐怖と憎しみが宿っていた。死への恐怖と死に導いたハプスブルクへの怒りが……

「や、めッ、苦し……」

首を締め上げ、彼を殺そうとする男。その男の頭部が突然、爆発した！　まるで爆弾が爆発するように。血が飛び散り、辺りは血の池と化す。激しい異臭がした。俺は無意識の内に手で顔を覆ついた。しばらくしてケータイを確認する。

『主催者：ハプスブルク 終了／残り1枚／残り2名』

『主催者：200枚目を引く者が決定した。ガズナに死を与える』

ガズナ……　さつき死んだ男の名前、か。その時、ケータイが鳴つた。

『主催者：ガズナ 脱落』

これで3人目……　3人目の死者が出てしまった。俺は眉をしかめさせながら、ケータイを閉じた。視界に入るのはおびただしい量

の赤い液体だった。そして、それを冷ややかに見つめるあの女性がいた。

//シヨン8*200枚目の死(後書き)

【現在情報】

逃走者：47名

脱落者：3名

//ミッション8* 殺戮のハジマリ

【A棟2F 職員室／トワイラル 確認】

「なんで、俺を助けて、ガズナを殺すように仕向けたんだ！」

俺はあの女性に向かつて怒鳴った。コイツのせいでハプスブルクは5枚引いてガズナが死んだ。それで俺は助かったのだが……

「別に。お前の方が使いやすそうだったから。それだけ」

「俺を……！」

「今、必要なのは協力、だ。協力しなければ、いずれ全員、死ぬ

はあ？ いきなり何言つてんだ？ ロイツ。

「私の推測だと、逃走者が1人になるか、全員が死ぬまでこのゲームは続く」

「全員が、死ぬって逃走者は50人もいるんだぞ！ 全員が死ぬまでってどんだけミッションをするんだよ！」

「……気付いてないか？ ミッションは徐々にレベルが上がっていく」

「…………！」

レベルが上がっている……！？

「ミッション1とミッション8。比べてみるといいだろ？ どうだ？ 上がっていると思わないか？」

「ぐ……！」

た、確かにそうかも知れない。ミッション1は簡単だし、誰も死はない。でもミッション8は誰かが必ず死ぬ。いや、下手したら全員が死んでいたかも知れない。

その時、職員室にいる全員のケータイが鳴った。そこで初めて気づいた。人の数がかなり減っている。いるのは俺と目の前の女性とミコート、ハップスブルク、プロイセンだった。他の人は面倒な事に巻き込まれない内にと去ったのか。

「このまま、レベルが上がり続ければ死ぬ人数も増える。ミッション30くらいで全滅かもな」

「クッ……！ どうすりやいいんだよ！ 主催者の下すミッションに従つて延命するだけかよ！」

「協力して主催者を見つけ、殺すしかない」

そんな簡単に出来るワケねえだろ！

「協力しなければ全滅。もちろん、協力するよな？」
「…………」

「コイツに協力するのは気が進まない。でも、彼女の言っている事は間違つていない。このままだと、ミッションによって全員が殺される。まだ、レベルが高くない内に、協力して主催者を倒すしかない。

「……わかつたよ。協力してやる」
「よし。私は“ブルボン”だ。よろしく」

彼女がそう言つた時、また全員のケータイが鳴り響いた。ミッション9？ いや、さつきも鳴つた。それがミッション9のメールだつたら今回が成功メールか？

俺はケータイを開いて確認する。未読メールは全部で2通。

『主催者：アゴラ 死亡』

『主催者：ゾロアスター 死亡』

は？ 2通とも死亡メール！？ どうなってんだ！？ 何でこの2人が死んだんだ！？ 自殺？ 他殺か！？

その時、職員室の扉が勢いよく開かれる。それと共に3人の逃走者が転がるように入ってきた。3人共、かなり焦ったような顔をしている。な、何があつたんだ！？

「や、やべえ！ ガチでやべえって！」

「扉、閉めろって！」

「わ、わかつて……ッ！ う、うわあッ！」

入ってきた男3人が扉から後ずさる。扉を開けて入ってきたのは……人、じゃない！ 入ってきたのは全身が真っ赤な、皮膚をひん剥いたようなデカい男だつた。いや、人じゃない。アレは怪物だ！ ボロボロになつた上半身の衣服。着ている、というよりからは纏つているだけだつた。下半身の衣服は多少ボロボロにはなつていたが、まだ上半身に比べればマシだつた。

片手にはボロボロになつた血まみれの金属バット。その先端からは鮮血と思われる液体が滴り落ちていく。まさか……！ アゴラとゾロアスターを殺したのはコイツなのか！？

「な、なにつ！？ トワイラー！ どうなつてんの！？」

ミコートが俺に抱き着いてくる。その体はガクガクと震えていた。

俺に聞かれてもそんな事は分からぬ。むしろ、俺が聞きたかった。……アイツは何なんだ！

「くそつ！ これでも喰らえつ！」

さつき、入ってきた男が椅子を投げる。それは怪物の右肩に当たって落ちる。ダメージは全くない。それどころか怪物が椅子を投げたの方を見た。

「ひつ、うわつ、わあつ！」

椅子を投げた男が後ずさりする。怪物が男に向かって走り出す。片手にバットを握つて。俺は田を背ける。聞こえてくるのは男の叫び声と何かを殴る音。何かが壊れ、折れる音！

「今だ！ 全員、逃げるぞ！」

ブルボンの声。俺は抱き付いていたミュートの腕を掴み、勢いよく、わき田も振りかえらずに思いつき走つた。今、俺の心を支配しているのはまぎれもなく恐怖だけだった！ 純粹な恐怖しかなかつた！

「う、わつ、がつ！」

職員室を出た所で別の男の声が耳に入る。俺はふと後ろを振り返る。頭を掴まれ床に押さえつけられた男。彼はさつき職員室に逃げてきた男の一人だ。恐怖と絶望に歪んだ顔。助けを求める顔。その顔にバットが振り下ろされた。

俺は田を背け、再び、全力で走り出した。ミュートの腕を掴んだまま、より遠くへ、より遠くへ走り続けた。道中、鳴るケータイを確認せずに……

*

【A棟3F 廊下／トイバー 確認】

まー、なんつーか。下が騒がしいな。ここの中の下つて職員室だつたよなー……。職員室で騒ぐと先生に怒られるよなー……。先生はいねえか。

でも、何の騒ぎなんだろ？ つーか、メールがさっきから立て続けに来るんですけど？ 潜らない内に確認しどくか。

『主催者：アゴラ 死亡』

『主催者：ゾロスター 死亡』

『主催者：コルトバ 死亡』

『主催者：ウマイヤ 死亡』

ひいっ！ 全部、死亡メール！ 一気に4人も……？ あわわ、ヤバいって！ これで7人も死んでんじやん！

私はその場に座り込む。ガクガクとして動けない。……アレ？ 下が静かになつた。まさか、この4人は下の職員室で殺された……？

その時、ドアを壊したような音がすぐ下から聞こえてきた。大きな人間が歩いた時に立てるような音も。……階段を上つている……？ 私はチラリと周囲を見渡す。階段がある。4階と2階に通じる階段が。その階段から何かが上つてくる足音。

「はあ、はあ、はあッ……！」

自分の息が荒くなる。心臓が今までにないほど、バクバクする。ミッション1の時とは比べものにならないほど、バクバクする。全身からイヤな汗が流れ落ちる。

何かが来る！ は、早く逃げないと！ でも脚が動かない。まる

で自分の脚じゃないかのようだ。なんで？ なんで…？

やがて、すぐ近くで足音。その足音は4階へと上らず3階で止まつた。息を殺す。少しでも音を立てたらこっちに来るかも知れない。しばらく止まっていたが再び動き出した。コツチに向かって歩いて来た！ 「コツチに来たあつ！！

「ひつぐうつ……」

ガクガクと震える体。^は這いつぶばるようにして後ろに下がる。せめて、どこか近くの教室に……でも、私が教室に入る前に足音の主は姿を現した。……人間じゃなかつた。怪物だつた！

2メートル近くある巨大な皮膚を剥いたように赤い体。太く赤い腕。薄い黄色の爪。異様に鋭く、長かつた。そして、衣服を纏わぬ上半身。その肩の後ろからはまだ小さい腕のようなもの。……新たなる腕が生えてきている？

「な、なに……？」

グロテスクな怪物が私にゆっくりと近づいてくる。その口からは血が滴り落ちる。殺されるッ！ 助けてえッ！

怪物は太い右腕で私を押し倒す。冷たい爪が私の顔にかかる。

「ひいッ、いやあッ……」

私は体を必死に動かして逃げようとする。でも怪物の力の前に私は何も出来なかつた。ふと、視界に入った。左腕。その先端にある長い爪。それが私を目がけて突っ込んできたのを！

//ミッション⑧* 殺戮のハジマツ（後書き）

【現在情報】

逃走者：42名

脱落者：8名

ストイバー

・ミッション①* ストイバー 酔っぱらいのマネをする

//ミシショーン＊兄弟の苦痛

【B棟4F 廊下／トワイラル 確認】

『主催者：ストイバー 死亡』

ストイバーも死んだのか。これで死んだ逃走者は全員で8人。残りは42人しかいないのか。

「ス、ストイバーってミシションーを実行した人、ですよね」「ああ、そうだな」

俺の横にいるのはミユートとハップスブルク、一緒に逃げてきたオスマンという男性。オスマンは職員室に逃げ込んできた男3人の内の1人だ。

ブルボンとプロイセンとははぐれてしまった。

「ねえ、ブルボンってさ、ミシション⁵の性行為をしろってミシションをした人じやなかつた？」
「そりいえ……！ って事はブルボンは女性だつたのか」

正直なところ、もう今はそんな事はどうでもよかつた。早くここから脱出しないとミシションか、あの怪物によつて殺されてしまう。

「くわつー、窓をぶつ壊そつてもどうやっても壊れやがらない！ 開ける事すらできねえ！」

近くの窓を壊そつと必死に動いているのはオスマン。でも窓はビクともしない。そう、どうやっても窓は壊せない。どうなつている

んだ？

「全く！ グズグズしてると来ちまづぜー ミッションも怪物もな！」

その時、全員のケータイが鳴った。また主催者からのミッションか。いや、もしかしたら誰かが死んだのかも。

『主催者…ミッション9* セレウコス ブワイフ 2人でジャンケンをしろ。負けた方は脱落とする。美しい兄弟の愛を見せてくれ。尚、事前に打ち合わせなどはしてはいけない』

くそッ！ マジ意味わかんねえよ…… 人の心を弄ぶよつなミッション、下しやがって！ 僕はケータイを力強く握りしめた！ 兄弟で殺し合いをしろって事かよ！！

【A棟4F 廊下／セレウコス 確認】

俺と兄さんは階段の近くでそのミッションを見た。俺が勝てばブワイフ兄さんは死ぬ。負ければ俺が…… そんなジャンケン、俺はやりたくない。

「ど、どうする？」

「やるしかねえだろ！ このままだと2人も死ぬんだぞ！」

「お、オイ、そんないきなり……」

兄さんは俺の手を掴む。無理やりジャンケンをせようとすると。俺はつい、勢いよく手を引く。……その時、俺はバランスを崩した。後ろに倒れる。後ろは確か、階段……？

「セ、セレウコス！」

「う、うわ、兄さ……！」

【B棟1F 美術室／ブルボン 確認】

『主催者：セレウコス 死亡』

『主催者：ミッショーン9 失敗。ブワイフは脱落とする』

私はそれだけを確認するとスマートフォンをしまう。ミッショーン9は失敗。2人とも死んだか。まあ、いい。私には関係のない事だ。

「人つて、こんなに簡単に死んでいいの？」

「次々と消されていくゲームなんだろうな。このゲームは。でも私は消されない。勝つて生き残る」

「……あの怪物、弟に似ていた」

「どうか、お前の弟はそんなに凄いヤツなのか。」

「その弟はどこだ？ 似ているんなら倒して貰いたいものだ」

「……死んだよ」

「……？」

「ミッション6を実行できずに」

「……という事はロマノフの姉か。コイツは。

ロマノフに似た怪物…… そういえばあの怪物が現れたのはいつなんだ？ あの怪物に殺された逃走者は少なくとも2人以上はいる。職員室で2人、殺されていた。

ミッションで死んだのがロマノフ、ガズナ、セレウコス。他は逃

走者か怪物による他殺だ。

「ロマノフの死体はどうした?」

「A棟の1階廊下に置いてきた……」

置いてきた……なら、まだあるハズだ。ロマノフの死体は。
……ありえないが、もし、あの怪物がロマノフだったら? そうすれば説明がつく。突然、他殺による死者が増えた事に。

その時、2人のケータイが連続して鳴った。最も私のはスマートフォンだが。

『主催者：ストア 死亡』

『主催者：シリア 死亡』

『主催者：タキトウス 死亡』

またしても他殺。あの怪物が彼らを殺したのだろうか? これは早く確認した方がいいかも知れない。ロマノフの死体があるかどうかを!

【B棟2F 廊下ノビザンツ 確認】

僕は辺りを窺いながら進む。あの怪物は一体何者なんだろう?
いつの間にここにやつて来たんだろう? A棟から来た逃走者によると怪物はA棟で逃走者を次々と殺しているらしい。
さつき、届いたメールでは3人の逃走者の死亡が書かれていた。
恐らく彼らも怪物によって殺されたのかも知れない。

そう思っているとまたメールが届く。遠くからもメールの着信音と思われる音が聞こえてくる。このB棟に逃げ込んだ人が多いのか知らない。そうなると怪物がここに……

『主催者：ミッション10＊ユグノー、ゴイセン、プレスピテリアン、ピューリタン 素手で誰かを殺したら武器を与える。また、ミッション10を受けた者を殺した者にも武器を与える。武器はアサルトライフル』のミッションは実行してもしなくてよい

今度は殺し合いをさせる気か。まだまだゲームが続くなら武器は欲しい。怪物が徘徊しているなら尚更、欲しいだろう。

それにアサルトライフルは軍用の武器。連射が可能な武器だ。高性能な武器。誰もが欲しがるハズだ。誰も何もしなければ誰も死はないが……

僕がその場から立ち上がった瞬間、僕のスマートフォンが鳴った。メールだ。

〃シニア兄弟の苦痛（後編）

【現在情報】

逃走者：37名

脱落者：13名

//ミシヨン10*プロイセンの決意

【A棟1F 廊下（＝ロマノフ死亡地）／ブルボン 確認】

死体はなかつた。あるのは大量の血。乾いてじす黒くなつた血。それだけだつた。

「ど、どうなつてゐる？ ロマノフは、私の弟は……生きてゐるの？」

ロマノフの姉、プロイセンがガクガクと体を震わせながら囁く。ロマノフが生きている、か。違うな。アレはもはやロマノフじやない。恐らくあの怪物の体はロマノフだろう。が、その魂はロマノフではない。

私とプロイセンのケータイが鳴る。ここに来る途中にも一度鳴った。それはミシヨン10を伝えるメールだった。では今度のメールは……

『主催者・タングート 死亡』

また、逃走者が死んだ。ミシヨンの犠牲になつたのか、あの怪物に殺されたのか……？

「わ、私、ロマノフをとめる…… ロマノフを…… 弟を、とめるツ！」

涙目になりながら、プロイセンは言った。その体はさつきよりも震えていた。それを見た私は無言でポケットに潜ませていたナイフを差し出す。これでロマノフを殺せ。

彼女は震える手でナイフを受け取る。そして、何も言わず、私の前から走り去つて行つた。

「期待はしていないけど、あの怪物を殺してくれたらラッキーだな」

【A棟4F 階段／ユグノー 確認】

『ごめんなさい。この言葉は誰に向けたモノなのかは分かりません。人殺しになつた自分に向けた言葉なのか、それとも階段から突き落とした人に向けた言葉なのか、私には分かりません。

でも1つだけ分かる事があります。私は何の罪もない人を殺しました。自分の為に殺してしまいました。死んだのは間違いないです。だつて私が彼を突き落としてすぐにメールが来ましたから。

『主催者：タングート 死亡』

ぽんやりしているとまた私のケータイが鳴つた。

『主催者：ミッション10＊ユグノー 成功 ユグノーに武器を』
える。武器はA棟4階の1～6教室にある』

『めんなさい。私、絶対に生き残りますから。アナタの命はムダにしません。

【B棟4F 廊下／トワイラル 確認】

ユグノーがミッションを実行した。誰も何もしなければ誰も死ないで済むミッションなのに……！　俺はため息をつく。

もし、これがロマノフが死ぬ前までだつたなら誰一人として実行しなかつただろう。でも、今や全ての逃走者が知っている。ミッシン失敗は脱落。脱落は死、という事を。そして、怪物が徘徊している事もほとんどの逃走者が知っているだろう。

『主催者：グプタ 死亡』

『主催者：アラベスク 死亡』

怪物は次々と逃走者を殺していく。逃走者は自分の為に逃走者を殺す。こんなに簡単に人が殺されていくなんて俺には信じられない。この死亡メールを見てもどこか全く別の世界の出来事のように感じてしまう。

今、ここで何が起こっているんだろうか……？

「……あ、もしもし、ブルボンさん？」

ハプスブルクが電話をかける。相手はブルボン。そういうれば離れになつてからかなり時間が経つ。彼女達は無事だろうか？特にプロイセンは無事だろうか？ 彼女は弟を失つた。その悲しみは計り知れない。……ロマノフは俺のせいである。

『どうしたの？ ハプスブルク』

「あ、いや、無事かなつて思つて……」

『私が死ぬワケないでしょ？』

「あ、そうですね。すいません」

『ま、プロイセンは知らないケド』

え？

「どういう意味ですか？」

『ああ、そうだ。これだけ教えてく。全員に伝えろ。あの怪物の正体はロマノフだ』

は？ 怪物の正体がロマノフ……？

『今、姉のプロイセンが怪物を殺しに行つた』

俺は素早くハプスブルクのケータイを奪い取る。そして、電話の相手のブルボンに向かつて怒鳴つた。

「ふざけんな！ 今すぐ、連れ戻せ！！」

『その声はトワイラルか？ まあ、いいじゃないか。上手くいけばあの怪物を殺れる』

「黙れッ！ プロイセンがあの怪物にかなうワケねえだらおが！！」

『そうか？ もしかしたらとめるかも知れんぞ？ ロマノフの姉はプロイ……』

「“もしかしたら”に賭けるんじゃねえ！」

もしかしたら…… もしかしたらこの大会を止められるかも知れない。そんな確証のない賭け。それで結果的にロマノフは死んでしまつた。

『じゃ、お前はどうしたい？ あの怪物をほっとき、他の逃走者が殺されるのをただ黙つて見ているか？』

「そ、そういう意味じゃねえ！」

『これは誰かがやらなければならぬ。でも普通の人間だったら無残に惨殺されるだけ』

ロマノフの姉、プロイセンだった元ロマノフである怪物をとめられる、かも知れない、という事か！ でもそんな確証はない。現

に職員室で怪物が入ってきた時、怪物はプロイセンに見向きもしなかつた。

でも、他に方法がない。また、賭けるしかないのか？ また“もしかしたら”、に賭けるしかないのか？

『幸運でも祈つとけ。プロイセンが怪物をとめられる事を祈るんだな』

「クッ……！」

そこで電話は切れた。俺は何も出来ないのか？ プロイセンに任せることはないのか？ いや、ダメだ！ 任せるだけじゃダメだ！ 僕も何かをしないとダメだ！！

「ねえ、私達はどうする？」

「俺はプロイセンを助ける。彼女と協力してあの怪物を倒すんだ！」
「お、オイ！ 正氣か！？ あの怪物は何人も殺していくるんだぞ！」

オスマンが俺に言う。そうか、そういうえばオスマンはあの怪物に殺されかけたんだったな。それなら俺達よりも恐怖が大きいだろう。それは仕方ない事だ。

「……あの怪物は俺がやる。プロイセンとならとめられるかも知れない」

その時、全員のケータイが鳴る。また誰かが殺されたのだろうか？

『主催者：マラッカ 死亡』

『主催者：ゴール 死亡』

『主催者：クレタ 死亡』

『主催者・ヒッタイト 死亡』

一気に4人も……！あの怪物が彼らを殺したんだろうか？急がないと。急いでアイツをとめないともうと多くの逃走者が死んでしまう！もう、誰も死なせなくはない！

俺はケータイを閉じると、勢いよく立ち上った。プロイセンと協力してあの怪物を倒す！

そう思っていた矢先の事だつた。再び、全員のケータイが鳴つたのは。

//シニアード*プロジェクトの決意（後書き）

【現在情報】

逃走者：30名

脱落者：20名

//ミッション11*プロジェクトの最期

【B棟4F 廊下／トワイラル 確認】

俺達はさつき届いたメールを確認する。主催者から送られてきたメールを。死亡メールか、ミッションメールか……

……！ も、そんな……！ 今度は、今度は俺に……！？

『主催者…ミッション11*トワイラル 悲劇を受け入れる』

悲劇を受け入れろ……？ どういう意味なんだ？ 悲劇ってなんだ！？ もう、充分、悲劇だろ！－！

「お、今度はお前じやねえか。トワイラルつてお前だろ？」

そうだよ！ 俺だよ！

その時、ケータイが再び鳴り響く。

『主催者：運命は破滅の一途を辿る。追跡者が自らと類する者を得する時、閉じ込められし者達は更なる危機へと墮ちる』

追跡者……？ それに類する者？ どういう意味だ？

「つ、追跡者つてよお、あの怪物なんじやねえのか？」

「あの怪物が追跡者……確かにそうかも知れないな。だとしたら類する者は……？」

「そ、それって同じ怪物が他にもいるって意味じゃないですか！？」

ハプスブルクが大きな声で言つ。それも考えられるな。だとすれ

ば“追跡者が自らと類する者を得する時”は怪物同士の融合か？それで怪物が進化し、多くの逃走者が殺されるって話か。

でも、それが正解だとすれば怪物は何体も存在するのか？ あんな怪物が他にいる事になる。でも、それってありえるのか？

「でも、なんで主催者はお前に「悲劇を受け入れる」ってミッション下したんだ？」

そもそも。「悲劇」ってなんなんだ？ 受け入れるって事はこの後、なんか起ころのか？ それをただ、見ていいないとダメなのか？ ……悲劇をとめるなつて事か？ ジャ「悲劇」は？

「そういえば、さつきの話に戻るが、怪物同士の融合を避けるなら“片方”を消せばいいんだよな？」

「“片方”はプロイセンつて人が殺しにいつたんじゃ……」

「そうだ！ アイツを連れ戻さないと… こままじや、殺されん！ ……って“片方”ってなんだ？ 怪物は2体つて思つているのか？ それなら話の筋は通るが。

片方はロマノフ。もう片方はまた別の人間。ロマノフの方をプロイセンが… 姉として弟をとめたいんだろうな。姉弟、か。

「でも、本当に怪物は2体いるんですか？」

「それは間違いないだろ。じゃないと融合できないだろ？」

「…何のために融合するんですか？」

「そりゃあ… アレ？ 何の為だ？」

……？

「一体でもあんなに強いのなら複数の方が逃走者を狩りやすくない

ですか？」

「む、むう……」

「複数体いる怪物が融合した方が強くなるのはなんとなく分かりますが、「閉じ込められし者達は更なる危機へと墮ちる」の意味がよく……」

確かにそうだ。怪物が複数いるならそのままの方が逃走者にとっては危険だ。一体の方が出会う確率は減る。逆に複数体いたら出会う確率は高くなる。

「全く……ワケわからんな。まあ、プロイセンってヤツが怪物をぶつ殺してくれりや、解決するんだけどな」

「待つて下さいよ。それだと、融合が起じらば、全ての逃走者が危機に陥りません」

「だから、なんだよ」

「この「全ての逃走者が危機に陥る」が悲劇だとしたら、それを受け入れれず、トワイラルさんは……」

…………！　「悲劇」が起こらず、俺がミッション失敗になる……！　ミッション失敗は、死！

「お、俺が殺されるのか！？」

「まあ、そうなるわな。まあ、プロイセンがあの怪物をぶつ殺すとは考えにくいかね」

「あ、もしかしたら、そのプロイセンさんが殺されるのが悲劇なかも」

「今度はそれか……一体、このミッションの真意は何なんだ？」

「なるほどねえ、確かにさつき、お前はプロイセンを助けようとして

てたしな。それを妨げるミッショング。妨げてなんかあるのかねえ「怪物のロマノフとその実の姉、プロイセンを戦わせたいんじゃないんですか？」主催者は

くそッ！ 実の姉弟を戦わせるなんて！ でも、何の為に？

「……2人が戦うとなんかあるのか？」

「僕にはちょっと……」

「はあ、血の繋がった姉弟を戦わせて何が楽しいんだ？」

血の繋がった、姉弟……？ 何だ？ なんか引っかかるな。姉弟、同じ両親から生まれた、似たような顔つき、肌の色、髪の色、瞳の色……似たような？ 「似た」？

その時、俺の頭で電撃が走った。全ての謎が解けた。そして、このミッショングの真意も理解できた。そうか、そうか！ そういう事だったのか！！

「どうか、分かつたぞ！」

「へ？」

「え、本当ですか！？」

そうだよ。これなら全て筋が通る。全ての話が繋がる！

「ミッショングーの“悲劇”はプロイセンの死、だ！」

「な、なに！？ それを黙つて受け入れろって事か！？」

「そして、融合は怪物同士の融合じやない！」

「え、え？ なんで？」

「怪物化したロマノフと“類する者”は血の繋がった姉プロイセンだ！」

「あ、どうか！ 姉と弟なら確かに似ている部分も多いですよ！」

「じゃ、じゃ、プロイセンが怪物を殺すのに失敗し、取り込まれるという事か！ そういう事なのか！！」

「そうなる…… そして、俺がそれを邪魔したら俺が殺される。＝ツシヨン失敗で……」

「そして、怪物は更なる進化を遂げるんだ。大切な姉を殺して……俺はそれを……見てるしか、ない」

【A棟4F 廊下／プロイセン 確認】

「ロマノフ」

4本の大きな腕。皮膚を引ん剥いたような肌。巨大な爪。先端が鋭く尖った爪。その腕と爪でどれだけの人々を殺したんだろう。私には分からぬ。分かりたくもない。

「グッオッ……」

巨大化した体。職員室で見た時よりもその姿は不気味で大きくなつていた。もうすでにロマノフの面影は、ほとんどなくなつてた。

「ロマノフ、もう終わりにしよう。私達はここで終わる」

不気味な、充血した血管が見える赤い眼球。瞳だけが黒色だった。その目がギョロリと動き、私を捉える。

「私だよ。分かる？ プロイセンだよ」

ナイフを握る手に力が入る。その手は震える。その震えはビリしひり止められなかつた。

「私と一緒にいこ？ 来世で会えるといいね

鋭い爪を私に向け、ロマノフが走り出した。私もナイフの先端をロマノフに向け、走り出す。私とロマノフの距離は縮まる。どんどん縮まっていく。そして、私とロマノフは接触した。

ロマノフ、死んじやつた時、置いてつてごめんね。

『主催者・ミッション11* 成功』

『主催者・全ては私の駒でしかない。逃走者に希望など存在せぬ。ただただ、生きるために他人を犠牲にすればよいのだ。もがき、苦しみ、絆を壊せ。人が人としてのモノを完全に失った時、人は全生物の最上位に立つであろう。冷酷で自己だけを考える者になれ』

//シニアード・プロジェクトの最期（後書き）

【現在情報】

逃走者：29名

脱落者：21名

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5823x/>

逃走中 ルイン・エスケープ

2011年11月23日12時50分発行